

# 『蜻蛉日記』 道綱母の前裁：平安貴族女性と庭

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6177">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6177</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 『蜻蛉日記』道綱母の前栽

——平安貴族女性と庭——

倉 田 実

はじめに

平安貴族邸宅となる寝殿造には、庭が造作され、前栽が植えられていた。別稿<sup>〔1〕</sup>では、『伊勢集』から歌人伊勢の庭や前栽とのかかわりを考えてみたが、この小稿では『蜻蛉日記』の道綱母の場合を採り上げることにした。伊勢は宮仕女房として生きたが、道綱母は宮仕に出ることなく「家の女」として生涯を終えている。この関係で、庭や前栽などにしても、伊勢は社交的・友好的な面でかわることが多かった。しかし、道綱母の場合は、ほぼ生活的・個人的な面でかわっている。以下、庭や前栽のありようを前景化しながら、道綱母の場合を検討していくことにする。引用本文は新編日本古典文学全集本により、『蜻蛉日記』には推定年時を付し、和歌は『新編国歌大観』によった。表記は、いずれも私に換えた。

## 一 前栽の「つくろひ」

「身の上をのみする日記」(中巻・一七三頁)であつても、そこに家の庭や前栽がかかわっている。庭は眺められるだけでなく、世話をする様子や兼家などのかかわりなども記されて、『蜻蛉日記』の世界に固有の地歩を占めている。その中には、庭園史・植栽史の史料となる記述も認められるようである。まずは、前栽の世話や手入れにかかわる事例を作品の時系列にこだわらずに見ていきたい。手入れを意味する「つくろふ」が使用される三つの用例から入ることにする。

最初の用例は、山寺で療養していた母が亡くなり、帰宅して庭を眺める段にある。

- ① もろともに出で居つつ、つくろはせし草なども、わづらひしよりはじめて、うち捨てたりければ、生ひこりていろいろに咲き乱れたり。わざとのことなども、みなおのがとりどりすれば、われはただつれづれとながめをのみして、「ひとむら薄虫の音の」とのみぞいはるる。

手触れねど花は盛りになりにけりとどめおきける露にかかりて

などぞおほゆる。

(上巻・康保元年(九六四)秋・一三三〜四頁)

家の庭は、女主人が管理・差配するものであつた。そのことを示すのが、右の箇所になる。「もろともに出で居つつ、つくろはせし草なども」とあるように、道綱母は、母と共に端近に居て、前栽を「つくろはせ」ていた。女性の桂姿では裾を引くので地面に下りることはせず、多くは下仕などに作業をさせていた。「馴れたる下仕どもぞ、草の中にまじりて歩く」(源氏物語・野分巻・二七六〜七頁)とあるのも、このことになる。

しかし、二人でつくろわせていた前栽の秋の草花は、山寺に向向っていた間、手入れをしなかつたので、生ひ茂つて色とりどりに咲き乱れていた。母が生きていれば、二人で普段からつくろわせ、「生ひこり」することはなかつた。庭は荒

れていたのである。その庭の様子で、母を亡くした悲しみが、新たにされている。だから「ひとむら薄虫の音の」とつぶやいている。これは、次の歌の引歌で、状況も近似している。

藤原利基朝臣の右近中将にて住み侍りける曹司の、身まかりて後、人も住まずなりにけるを、秋の夜更けて、ものよりまうで来けるついでに見入れければ、もとありし前栽も、いとしげく荒れたりけるを見て、早くそこに侍りければ、昔を思ひやりてよみける

君が植ゑしひとむら薄虫の音のしげき野辺ともなりにけるかな

(古今・哀傷・八五三・三春有助)

藤原利基に仕えていた三春有助が、主人の亡くなった後にその曹司にやつて来てみると、前栽がひどく荒れ果てていた。そこで、ここに住んでいた往時を懐かしんで詠んだのが、この歌になる。手入れをさせる主人がいなくなると、野辺のよな荒れた庭になるのであり、改めて故人が偲ばれるのである。

道綱母は、この歌句を口ずさんで「しげき野辺」となった庭を眺めながら母を懐かしみ、さらに詠歌している。歌は、「手入れをしないけれど、花は盛りになつていたことだ。母がとどめおいた慈愛の露によつて」と詠まれている。荒れたことは詠まずに、母によつて花盛りを迎えたとして、偲んで独詠したのである。「手触れねど」とされているが、前栽に手入れが必要なのが前提としてあろう。母と「つくるひ」したことが思い出となつているのである。

次は、唐先祓いから帰宅後のものになる。

② さいつころ、つれづれなるままに、草どもつくるはせなどせしに、あまた若苗の生ひたりしを取り集めさせて、屋の軒にあてて植ゑさせしが、いとをかしうはらみて、水まかせなどせさせしかど、色づける葉のなづみて立てるを見れば、いと悲しくて、

稲妻の光だに來ぬ屋がくれは軒端の苗も物思ふらし

と見えたり。

(中卷・安和二年(九六九)六月・一九九頁)

所在ない折にまかせて、道綱母は草花を「つくるはせ」、若苗を軒下に植えさせている。若苗は、歌からすると、稲苗になる。「屋の軒にあてて」植えさせたのは、樋のない屋根から落ちる雨垂れを利用しようとしたからであろう。稲が庭に植えされた事例として貴重である。植えさせるのは、「つくるひ」の一環である。そして、庭の手入れは、①を併せると日々の生活の営みになっており、所在なごの慰めにもなっている。ここでは、その稲が実り始めて水を撒かせたりしても、葉が黄ばんで生気を失って立っている状態になっている。その様子を見て悲しくなった道綱母は独詠している。

この歌は、稲光によって稲が実るといふ俗信<sup>②</sup>によっているとされているので、若苗は稲苗になる。歌は、「稲妻」の「つま」に「夫<sup>つま</sup>」を暗示して、「稲光も夫も来ない家の陰では、軒端の苗も私も物思いするようだ」と詠まれている。色づいて伸び悩んでいる稲葉に、夫の来訪のない孤独なわが身がよそえられたのである。

三例目の前栽の「つくるひ」は、鳴滝籠りから帰宅した折になる。

③ 心地も苦しければ、几帳さし隔ててうち臥すところに、ここにある人、ひやうと寄り来て言ふ、「撫子の種取らむとしはべりしかど、根もなくなりにけり。呉竹も、一筋倒れてはべりし。つくるはせしかど」など言ふ。ただいま言はでもありぬべきことかなと思へば、いらへもせであるに、

(中巻・天禄二年(九七一)六月・二五二―三頁)

鳴滝籠りで、出家・離婚という危機があったにもかかわらず、帰宅した家の侍女は暢気である。寝所にまでやって来て、前栽の様子を報告している。「撫子の種を取ろうとしましたが、枯れて根もなくなり、呉竹も一本倒れて、つくるわせてもまっすぐになりません」と言うのである。今言わなくてもいいことなのにと、道綱母は返事もしないでいる。これを聞いた兼家が戯言で応じていくが、ここは割愛した。

撫子は、根株ごと入手して移植することもあるが、道綱母邸では種を取って生育させようとしている。これも「つくるひ」である。移植する場合が多いようだが、播種の事例として貴重であろう。しかし、ここでは種が取れなかったようである。呉竹のことは後に扱うが、侍女の「つくるはせしかど」の言葉のあとには、集成本が指摘するように「はかばかし

くない」などの語が略されていよう。「枯れてしまった」（全注釈）のでも、「植え直させた」（全講）のでもなく、撓ったままであることをいうのであろう。とにかく呉竹の「つくるひ」の事例となっている。

前栽は常に「つくるひ」がされて維持されていた。以上の三例は、そのことを如実に示している。「つくるひ」には主人の意向が働くのであった。そして、庭は「つくるひ」の語がなくても、その実際はもつと具体的に記されている。そうした事例をさらに見ていきたい。

庭は「つくるひ」がされることで、鑑賞されることになる。だから、庭を褒めることは、主人を褒めることにもなっていた。また、手入れの行き届いた庭を、人にどう見るかと思ねることで、自身の造作の成果を確認することもあった。次は、その用例と思われる。病の兼家を道綱母がひそかに訪れた段である。

④ 明うなれば、男ども呼びて、部上げさせて見つ。「見たまへ、草どもはいかが植ゑたる」とて、見出だしたるに、「いとかたはなるほどになりぬ」など急げば、

（上巻・康保三年（九六六）三月・一四三頁）

兼家邸で朝を迎え、家人に部を上げさせて庭を見るところである。兼家は道綱母に庭を見るようにと誘い、「草どもはいかが植ゑたる」と尋ねている。新全集では「愛情をこめたいざないの言葉。兼家自身も病気で庭を鑑賞する暇がなかったのであろう」としている。しかし、この解釈では、本文は「いかがなりたる」になるのではなからうか。訳は「庭に植ゑた草花はどんなふうかな」でかまわないが、庭好きな道綱母に、自邸の評価を尋ねたのではなからうか。どんな風に植わっているかねという言い方で、草花の配置や手入れの仕方の善し悪しの評価をもらおうとしたのだと思われる。道綱母を立てたのである。それが愛情表現になっている。しかし、帰りを急ごうとする様子が記されるだけで、道綱母の判断は記されていない。とにかく、諸注に指摘はないが、この記述は庭作りや「つくるひ」の成果を尋ねたものと考えたいのである。兼家邸では、兼家が前栽を管理していたことになる。

草花は、手入れがされずにほおっておくと、①にあったように「生ひこりて」しまう。そこで「つくるふ」ことになる

わけだが、その作業の一つを実際的に言うると、「掘りあかつ」になる。

⑤ かくて忌果てぬれば、例のところに渡りて、ましていとつれづれにてあり。長雨になりぬれば、草ども生ひこりてあるを、行ひのひまに、掘りあかたせなどす。

(中巻・天禄二年(九七二) 五月・二三四頁)

父の家での長精進を終えて、自邸にもどったところである。長雨になり草花が生い茂ってきたので、勤行の合間に「掘りあかた」させている。「あかつ」は、後の⑧にある「わかつ」の類義語で、ここは草花を掘りだして株分けすることである。どこかに配ると解する説(講義・全講など)があるが、そうではない。前栽の手入れの一つが、「掘りあかつ」と、株分けになる。陰暦五月は、これに適した時節であり、そのことを道綱母は心得ているのである。

前栽は手入れをするだけでなく、見栄えをよくするために清掃も必要になる。この用例も認められる。

⑥ 南の廂に出でたるに、つつましき人の氣、近くおぼゆれば、やをらかたはら臥して聞けば、蟬の声いとしげうなりにたるを、おぼつかなうて、まだ耳を養はぬ翁ありけり。庭掃くとて、箒を持ちて、木の下に立てるほどに、にはかにいちはやう鳴きたれば、驚きて、ふり仰ぎて言ふやう、「よいぞよいぞと言ふなは蟬来にけるは。虫だに時節を知りたるよ」と、ひとりごつに合はせて、「しかしか」と鳴きみちたるに、をかしうもあはれにもありけん心地ぞあぢきなかりける。

(下巻・天禄三年(九七二) 六月・三〇二―三三頁)

南廂に出た道綱母が、「なは蟬」(未詳)が鳴いているのにやと気づいた、庭で掃除する耳の遠い翁の言動を見聞するところである。蟬が鳴いているのも分からずいたところ、一段と高く鳴いたことでやと気づいた翁の独り言に合わせ、さらに蟬が一带に鳴き出したのが面白かったわけだが、この様子も庭を考える史料となろう。一つは、翁の独り言にあるように、鳴く蟬で時節を知り、それによつて庭の風情を感じるということである。貴族だけでなく、下々の人々にもその感覚があったことになる。もう一つは、「庭掃くとて、箒を持ちて」とあるように、翁が貴族邸の庭を、箒で清掃することである。貴族邸には、清掃や門番などに従事する老人を置いていたことは、『源氏物語』「末摘花」巻の末摘花邸に

も認められる。庭は、こうした翁や下仕によって、実質的に維持されるのである。

草木は、やがて枯れたり散ったりすることになるが、その始末の様子も記されている。

⑦ 「太刀とくよ」とあれば、大夫取りて、簀子に片膝つきてゐたり。のどかに歩み出でて見まはして、「前栽をらうがはしく焼きためるかな」などあり。やがてそこもとに、雨皮張りたる車さし寄せ、男どもかるらかにて、もたげたれば、はひ乗りぬめり。下簾ひきつころひて、中門より引き出でて、前駆よいほどに追はせてあるも、ねたげにぞ聞こゆる。日ごろいと風はやしとて、南面の格子は上げぬを、今日かうて見出だして、とばかりあれば、雨よいほどにのどやかに降りて、庭うち荒れたるさまにて、草はところどころ青みわたりにけり。あはれと見えたり。

（下巻・天禄三年（九七二）二月・二七四頁）

大納言に昇進した兼家が、道綱母のもとに泊り、翌朝帰るところである。簀子にのんびりと出て来た兼家は、庭を見まわして、「前栽をらうがはしく焼きためるかな」と感想をもらしている。枯れた草花や落葉などが乱雑に焼かれていたのである。時節は二月で野焼のころである。生活の知恵として、貴族邸でも枯れた草花が焼却されたことが知られよう。『山水抄』に「花萎シナン後ハ晴ノ所ヲバ皆掘除クベキナリ」とあり、落葉だけでなく、根ごと抜き取って、処理したことが知られるが、それも焼却されたのであろう。これも、「つころひ」の一環になる。そして、この作業をしたのが、先の翁などになる。だから、「らうがはしく」焼かれたのかもしれない。

兼家が帰ったあと、道綱母はその庭を南廂から見出だしている。荒れた庭は、「草はところどころ青みわたりにけり」という状態であった。「草は」は、底本「くちは」で、「朽葉」のままにするか、「くさは」の誤写で「草は」とも「草葉」ともされている。ここは、前栽焼きがあつたとされているので、「朽葉」では不都合であらう。「草は」で考えておきたい。前栽焼きで荒れた庭に、早くも芽をだした草葉が見えたのである。その光景も時節を知らせるものとなっている。

前栽の「つころひ」を見て来た。②にあつたように新たに植栽することも、その一環であり、さらにもその前栽用の草



花を譲り受けた事例を見てみたい。

## 二 移植される前栽

前栽の草木は、先の③にあったように播種の他に、多く移植されて、「つくろひ」されていた。この節では、移植の事例を二例見ることになる。一つ目は、章明親王から薄を請い受けた折のことである。

⑧ そのころほひ過ぎてぞ例の宮に渡りたまへるに、まゐりたれば、去年も見しに花おもしろかりき、薄むらむらしげりて、いと細やかに見なければ、「これ掘りわかたせたまはば、少し給はらむ」と聞こえおきてしを、ほど経て河原へものするに、もろともなれば、「これぞかの宮かし」など言ひて人を入る。「まゐらむとするに折なき。類のあればなむ。一日とり申しし薄聞こえてと、さぶらはむ人に言へ」とて引き過ぎぬ。はかなき祓なれば、ほどなう帰りたるに、「宮より薄」と言へば、見れば、長櫃といふものに、うるはしう掘り立てて、青き色紙に結びついたり。見れば、かくぞ、

穂に出でば道ゆく人も招くべき宿の薄をほるがわりなき

いとをかしようも、この御返りはいかが、忘るるほど思ひやれば、かくてもありなむ。

(上巻・応和三年(九六三) 六月・一二七〜八頁)

この引用冒頭部の「まゐりたれば」の主体を、兼家にする説もあるが、道綱母としておきたい。やや分かりにくいので、概要を記せば、去年も伺った折に花が美しかった宮邸で、今年も薄が群生して、とてもほっそりとしたので、「これ掘りわかたせたまはば、少し給はらむ」と懇願したことがあった。しばらく経って、河原に夏越の祓に出かけて宮邸の側を通り過ぎる際に、一緒にいた兼家が、同行者がいるため参上できない無礼と、お願いしておいた薄をよろしくとの伝言を

託した。祓を済ませて帰宅してみると、章明親王から薄が「長櫃といふものに、うるはしう掘り立て」られて、歌が「青き色紙」に結び付けられて贈られていたことになる。道綱母が章明親王に薄をねだったことを兼家は聞かされていたのである。道綱母の願いを察して、兼家が気をきかしたのである。

この記事は、薄も根株ごと贈答され、移植された事例となる。親しい人には、前栽の草花をねだることもあった。道綱母は、「掘りわかつ」ことがあれば、少しいただきたいと願ったのである。この「掘りわかつ」は、④の「掘りあかつ」と同義で、株分けする意である。この両例で、群生する植物は、移植して済ませるだけでなく、生長すると株分けされたことが確認できよう。それが風流を解する人どうしで贈答に供されたのである。

この記事は、贈る際の趣向も窺われて興味深い。章明親王は長櫃に土を入れて掘り、薄をきれいに植え立てたのである。物を贈答する際に、硯箱や櫛箱の蓋や身に、物を置いたり入れたりするのが当時の作法であった。ここも諸注に指摘はないが、章明親王はそれに倣って、薄なので長櫃を利用したのであろう。風流な宮の贈答の趣向なのである。さらに、「青き色紙に結びつけた」、送り状ともなる歌も、工夫を凝らしている。「青き」は、⑦に「草はところどころ青みわたりにけり」とあったように、緑色のことである。

歌は、「はつきりと穂に咲き出たならば、道行く人も招くことのできる私の家の美しい薄を、あなたが欲しがるのは何とも切なく、掘って贈るのも、訪れがなくなるかと思うとつらいことです」と詠まれている。「秀に出づ」と「穂に出づ」、「欲る」と「掘る」がそれぞれ掛けられ、人を招くとされる薄を道綱母に贈ってしまったら、今後わたしの所にはお出でにならなくなるでしょうと戯れたのである。薄、あるいは女郎花だからこそ可能な歌の措辞となっており、来訪がなくなるとの懸念をわざと仕組んだのである。

薄の宮邸からの移植には、兼家の心遣いがあった。また、章明親王との親密な交誼も窺えた。道綱母の仕合わせな時期であったことになる。しかし、状況や心境が変わると、同じ移植であっても、そこには陰影がもたらされる。それが二つ

目の事例になる。

二つ目は、呉竹（淡竹の一種）の移植になる。

⑨ さはれ、よろづにこの世のことはあいなく思ふを、去年の春、呉竹植ゑむとて乞ひしを、このごろ「奉らむ」と言へば、「いさや、ありも遂くまじう思ひにたる世の中に、心なげなるわざをやしおかむ」と言へば、「いと心せばき御ことなり。行基菩薩は、ゆくすゑの人のためにこそ、実なる庭木は植ゑたまひけれ」など言ひて、おこせられたれば、あはれに、ありしところとて、見む人も見よかしと思ふに、涙こぼれて植ゑさす。二日ばかりありて、雨いたく降り、東風はげしく吹きて、一筋二筋うちかたぶきたれば、いかで直させむ、雨間もがな、と思ふまゝに、

靡くかな思はぬかたに呉竹の憂き世の末はかくこそありけれ（中巻・天禄二年（九七二）二月・二二九～二〇頁）

前年に、ある人に頼んでおいた呉竹が届けられた際の記事である。前年とは心境が変わってしまっていて、道綱母は出家を考えるようになっていた。呉竹を贈りましようと言われて、まともな人生を全うできそうもないので思慮のないようなことはしたくないと辞退の返事をしている。すると、その人は、行基菩薩は将来の人のために「実なる庭木は植ゑ」たのだとして、贈ってきてしまう。呉竹は「実なる庭木」ではないが、竹類は一般に筍を食すことができるので、それに準じて贈ったのであろう。しかし、道綱母はそのことを思わずに、亡き将来、ここが自分の住んでいたところだと見てほしいと思つて、涙ながらに植えさせている。移植させたのである。これが③で侍女が言っていた「呉竹も、一筋倒れてはべりし」になろう。呉竹は倒れやすいのであり、移植して二日ほどで、すでに「一筋二筋うちかたぶ」いている。直させたいと思ひながら、その様子を歌にして、心境を詠んでいる。

歌は、「傾き靡いでいることだ。思いもかけない方角に呉竹は。竹の節ではないが、辛い人の世のわたしの行く末は、こんなうらぶれた姿なのに違いない」と詠まれている。「世」は竹の縁語の「節」と掛けられている。傾き撓つた呉竹の様子に、自身の行く末が重ねられて、案じられたのである。

兼家にはすでに近江と呼ばれる新たな女性が存在している。兼家との関係に絶望的な思いを抱かざるを得ない道綱母には、傾いた呉竹にさえ、自身の姿が投影されてしまうのである。章明親王から薄が贈られた時点とは、まったく違ってしまっているのである。

以上、二節にわたって前栽の「つくるひ」のありようを見てみた。「植ゑ」「種取る」「掘りあかつ」「掘りわかつ」「掃く」「焼く」、そして、移植などが、その一環として『蜻蛉日記』には記されていた。これらの事例は、道綱母に固有なことでなく、広く貴族女性たちにも行われていたことであろう。道綱母の日常も、こうした「つくるひ」された前栽で、慰めを得ていたと言えそうである。しかし、作品中の前栽の用例を見わたしてみると、必ずしもそうとばかりは言えないようである。続いて、道綱母固有の前栽とのかかわりを指摘していきたい。

### 三 庭への視線

寝殿造の庭は、『作庭記』などから知られるように、寝殿南廂からの眺望を基本として造作されていた。道綱母の家の規模は未詳だが、やはり南廂などから庭を眺められるようにしたことであろう。そして、折々の心境が、おのずと見るところを規制していた。見つめられた庭の風景には、自身の心境が投影されるのである。先の②の色づいた稲葉や、⑨の傾いた呉竹を詠んだ歌のようにである。物語では、心象風景とされるものであり、『蜻蛉日記』にも同じような事情が認められよう。道綱母は、どのように庭を眺めていたのか、この節では、その事例をすでに引用した以外から取り出していきたい。したがって、庭とかわる平安貴族女性の個別的な事例となる。以下、該当する本文を列挙する。眺める意の語彙に一重線、眺められた物に二重線、及びその折の道綱母の心情・心境を表す部分に波線を付した。

- ⑩ 六月になりぬ。ついたちかけて長雨いたうす。見出だして、ひとりごとに、

わが宿の嘆きの下葉色深くうつろひにけりながめふるまに

(上巻・天曆十年(九五六) 六月・一〇四頁)

- ⑪ 前栽の花いろいろに咲き乱れたるを見やりて、臥しながらかくぞいはるる。かたみに恨むるさまのことどもあるべし。

もも草に乱れて見ゆる花の色はただ白露のおくにやあるらむ

とうちいひたれば、かくいふ。

みのあきを思ひ乱るる花の上の露の心はいへばさらなり

などいひて、例のつれなうなりぬ。

(上巻・天徳元年(九五七) 秋・一一一―一二頁)

- ⑫ これ(荒れた家)をつれなく出で入りするは、ことに心細う思ふらむなど、深う思ひ寄らぬなめりなど、千種に思ひ乱る。ことしげしといふは、何か、この荒れたる宿の蓬よりもしげなりと、思ひながむるに、八月ばかりになり  
にけり。

(上巻・康保三年(九六六) 七月・一四七―八頁)

- ⑬ 暮らし明かして、格子など上ぐるに、見出だしたれば、夜、雨の降りける気色にて、木ども露かかりたり。見るま  
まにおほゆるやう、

夜のうちはまつにも露はかかりけり明くれば消ゆるものをこそ思へ

(中巻・天禄元年(九七〇) 五月・一九一―二頁)

- ⑭ 今朝も見出だしたれば、屋上の霜いと白し。童べ、昨夜の姿ながら、「霜くちまじなはむ」とて騒ぐも、いとあ  
はれなり。「あなさま、雪恥づかしき霜かな」と口おほひしつ、かかる身を頼むべかめる人どものうち聞こえごち、  
ただならずなむおほえける。

(中巻・天禄二年(九七一) 九月・二六五頁)

- ⑮ 三日になりぬる夜降りける雪、三四寸ばかりたまりて、今も降る。簾を巻き上げてながむれば、「あな寒」と言ふ  
声、ここかしこに聞こゆ。風さへはやし。世の中いとあはれなり。

(下巻・天禄三年(九七二) 二月・二七五頁)

①6 八日の日、未の時ばかりに、「おはしますおはします」とのしる。中門おし開けて、車ごめ引き入るを見れば、御前ののをのこども、あまた、轆につきて、簾巻き上げ、下簾左右おし挟みたり。榻持て寄りたれば、下り走りて、紅梅のただいま盛りなる下よりさし歩みたるに、似げなうもあるまじう、うちあげつつ、「あなおもしろ」と言ひつつ歩み上りぬ。

(下巻・天禄三年(九七二)二月・二八七〜八頁)

①7 このごろ、空の気色なほりたちて、うらうらとのどかなり。暖かにもあらず、寒くもあらぬ風、梅にたぐひて鶯をさそふ。鶯の声など、さまざまなごう聞こえたり。屋の上をながむれば、巢くふ雀ども、瓦の下を出で入りさへづる。庭の草、氷に許され顔なり。

(下巻・天禄三年(九七二)二月・二八九頁)

①8 このごろ、庭もはだらに花降りしきて、海ともなりなむと見えたり。今日は二十七日、雨昨日の夕より降り、風残りの花を払ふ。

(下巻・天禄三年(九七二)二月・二九二頁)

①9 三月になりぬ。木の芽雀隠れになりて、祭のころおぼえて、

(下巻・天禄三年(九七二)三月・二九三頁)

②0 二月になりぬ。紅梅の、常の年よりも色濃く、めでたうにほひたる、わが心地にのみあはれと見たれど、なにと見たる人なし。

(下巻・天延元年(九七三)二月・三〇九頁)

②1 かかることを尽きせずながむるほどに、ついたちより雨がちになりたれば、「いとど嘆きの芽をもやす」とのみなむありける。

(下巻・天延元年(九七三)二月・三一〇頁)

②2 九月になりて、まだしきに格子を上げて見出だしたれば、内なるにも外なるにも、川霧立ちわたりて、麓も見えぬ山の見やられたるも、いともの悲しうて、

(下巻・天延元年(九七三)九月・三二七頁)

以上が、道綱母の視線で捉えられた庭の光景が記される箇所になる。個々の事例を逐一検討する余地はないので、前節までの事例も含めて全体を時系列で整理すると次のようになる。

No.	語彙	時節	物	心情	和歌
上卷					
⑩	見出だす	六月	うつろった下葉	嘆き	独詠歌
⑪	見やる	秋	咲き乱れた花	思ひ乱る	贈答歌
①	ながむ	秋	生ひこりた草花	つれづれ	独詠歌
⑫	ながむ	七月	蓬の茂り	思ひ乱る・思ひながむ	
中卷					
⑬	見出だす	五月	松露	消ゆる物思ひ	独詠歌
②	見る	六月	色づいた稲葉	いと悲し	独詠歌
⑨		二月	傾いた呉竹	憂き世	独詠歌
⑭	見出だす	九月	霜	あはれ・ただならず	
下卷					
⑦	見出だす	二月	雨・荒れた庭・草	あはれ	
⑮	ながむ	二月	雪	あはれ	
⑯	見る	二月	兼家・紅梅	うらうらとのどか・許され顔	
⑰	ながむ	二月	空・梅・鶯・雀・草		
⑱	見ゆ	二月	散る花		
⑲		三月	雀隠れの木の芽		
⑳	見る	二月	紅梅	あはれ	
㉑	ながむ	二月	木の芽	ながむ・嘆き	
㉒	見出だす	九月	川霧	悲し	独詠歌

右で、②が中川転居後になる。一覽してみて、上中下巻通して用例があることが知られよう。庭のさまざまな草木や天象が眺められていて、特に「見出だす」が多いのは、積極的に庭を見ようとすゝる意志が認められる。また、この他に、「ながむ」で庭を見る行為が記されており、視線を送る際に「嘆き」「思ひ乱る」「思ひながむ」「物思ひ」「悲し」「あはれ」などの心情・心境を表す語彙の伴う場合が多く認められる。庭の前栽は、こうした思いで眺められていたのである。⑬を除くと、物思いがおのずと庭に視線を漂わせていることが知られよう。『蜻蛉日記』に記される庭や前栽は、道綱母の「身の上」のありようと大きくかかわって見られていたのであり、だから記されたことになる。

また、独詠歌に連続する場合が、上巻の⑩①と中巻の⑬②⑨に認められる。⑩の独詠歌は、その後訪れた兼家に伝えられて贈答歌が交わされ、①は母の死を詠んでいた。これに対して中巻の場合は、物思いが前栽に触発されておのずと独詠歌になっている。道綱母の独詠歌は、前栽にかかわって詠まれていることが指摘できよう。

こうした用例の連続の他に、下巻の⑯⑰⑱などは、どこか穏やかな視線で庭が素直に見られている用例があり、兼家との関係に一時の静穏があったことを思わせる。下巻の用例⑯は、兼家の来訪する姿が、「紅梅のただいま盛りなる下よりさし歩みたるに、似げなうもあるまじう」というように、前栽の紅梅とともに見られている。『蜻蛉日記』で、こだけが、前栽に兼家が配されている。そして、紅梅のもとを歩み来る風姿を好ましく見出だしている。『蜻蛉日記』は下巻になって、兼家の姿が記されるようになっていく。道綱母に客観的な視線が確保されるようになったからであり、総じて夫婦関係への諦観がそうさせているようである。しかし、ここは、兼家の風姿を好意的に見出だしている。この箇所は、道綱母が迎えた養女のことを兼家が認知し、その裳着まで考えていることが記された後に位置している。家族関係の満足感が、兼家を見る視線に表れていることになろう。

それは庭を見る視線にも表れている。⑯に続く⑰⑱⑲などには、物思いする様子はない。⑰には、「うらうらとのどか



なり」とされ、空・梅・鶯・雀・草が見られている。⑮の散る花にも、自身の境遇は重ねられていない。⑯の「木の芽雀隠れになりて」には、細やかな観察も窺われよう。『蜻蛉日記』の中で、この四例は、晩年の家族関係に満足した思いで前裁が見られていたと言えよう。しかし、その満足感は、持続するものではなかったところに、道綱母の不幸があったこととなる。

この節では、道綱母固有の前裁とのかかわりを簡単ながら確認したことになる。

### おわりに

以上、『蜻蛉日記』において、庭や前裁が記される事例を見て来た。家で夫を待つ女の境涯を生きたことになった道綱母だからこそ、庭や前裁の記述がされたことになろう。ここには、一、二節で扱ったような、貴族女性一般に敷衍できそうな庭へのかかわり方と、三節での道綱母固有のかかわり方が、混在していた。共に庭や前裁を考える貴重な史料であったと言えよう。また、生活の営み、夫婦関係の営みといった性格が庭とのかかりで窺え、別稿で扱った宮仕女房として生きた伊勢の『伊勢集』に見られる社交的なありようとは違った側面が指摘できるようである。この相違には、日記文学と和歌文学との違いも関係しているようが、この点はさらに別途考えることにしたい。

### 注

- (1) 拙稿「平安貴族女性と庭―『伊勢集』の前裁―」（『大妻女子大学紀要―文系―』48、二〇一六・三）。
- (2) 松本蜜至「『稲妻の光だにこぬ』―『蜻蛉日記』の歌をめぐって―」（『群女国文』4、一九七四・一二）。
- (3) 森蘊『作庭記』の世界』（NHKブックス、一九七六・三）の翻刻による。